

文化

ふくしま アート新世代

◆3◆

画家 サガキケイタさん (福島大大学院修了)



制作に打ち込むサガキさん

ポッティエリの名作「ビーナスの誕生」が、魅惑的(みまもろりょう)のイラストに変化する。離れて見ると有名な古典絵画、近づいて見るとさまざまなキャラクターの集合体。ギャップによる驚きが見る人の価値観を揺さぶる。

「ビーナスの誕生」をモチーフにした作品「The Gestaltzerfall of Venus」は縦一七二・五センチ、横二七八センチで、ペンと薄墨を使った。作品は基本的にオリジナルと同じ大きさで作る。既に価値を認められている作品を自分の想像上のキヤ

流動する価値観

ラクターたちで描くことで、価値観の流動性を表現している。また、作品にはさまざまな対比を含ませている。ポッティエリが着想を得た神話と西洋絵画と日本的なタッチなどの対立する概念を取り入れ、対極にあるものは表裏一体であること

を表している。高校卒業までは剣道一筋で石川県で過ごし、平成十四年に福島大教育学部に入学した。同大大学院を出て東京で美術の教師として七年間勤め、現在は画家として制作を続けている。小学校中学年の時に「曼荼羅(まんだら)」

を見た思い出が作風に影響している。曼荼羅とは、仏教や密教の宗教画で仏たちが集まる場所を描いたもの。原色を使った色使いや緻密な描写、地獄絵図のようなイメージに衝撃を受けた。大学生になつてから歴史などを調べて描き始めた。仏を宇宙(全体)、教義を学ぶ

教徒たちを個とする、曼荼羅が持つ対立の関係性から、作品のコンセプトを生み出した。東日本大震災が起きた日は、都内の勤め先の高校にいた。六年間過ごした福島の復興を願ひ、二十六年、浄土信仰の仏画「来迎図(らいごうず)」をモチーフにした「Our Folklore Ver.1」を制作した。緻密に描いたのは、

「安達ヶ原の鬼婆(おにばば)」と県内百二十五の民話

のキャラクターだ。人から人へ語り継がれてきた地域のアイデンティティを表現し、復興の象徴になることを願ひ描き上げた。

妻の実家が県内にあり、今も訪れることが多い。「教授、同期など福島でたくさんの人にお世話になった。福島に行つて良かったと思つている」と学生時代を振り返った。

昨年、ドイツのミュンヘンのギャラリーで個展を開いた。来場者が驚くポイントには日本も海外も変わらないという。「今後、作品を見た人がコメントを知らなくても、視覚的な部分で純粋に楽しめるような作品を作り続けていきたい」と意気込んでいる。

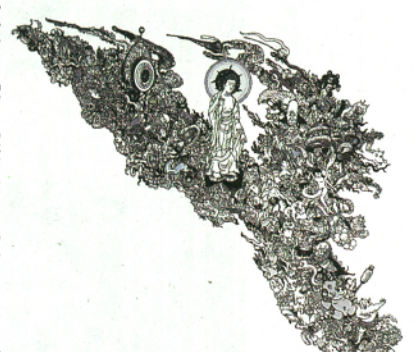
次回7月1日掲載



The Gestaltzerfall of Venus (縦172.5センチ、横278センチ) 2017年

ギャップによる驚き

ビーナスの顔部分の拡大



Our Folklore Ver.1 (縦360センチ、横405センチ) 2014年